

斜里神社創建200年に思う

金 喜多一

〒099-41 北海道斜里郡斜里町光陽町37番地 斜里町文化財調査委員

1. はじめに

斜里町の鎮守・斜里神社の創建は、遠く寛政8年(1796)、シャリ場所最初の請負人・村山伝兵衛(三代目)が、シャリ場所の守護神として斜里神社の社祠を奉斎したのが始まり「斜里町史」(昭和30年刊)で、今年が創建200年の節目に相当する。しかし、伝兵衛が松前藩から正式にシャリ場所の差配を命じられたのは寛政2年で、神社創建の6年前ということになる。そこで本稿は郷土史の研究に携わるものとして、この機会に遠い寛政の昔に思いをはせ、当時をしのんでみたい。

2. シャリ場所の範囲と村山伝兵衛

当時のシャリ場所の範囲は、網走の能取から知床半島の突端に至るまで、すなわち後の斜里・網走両郡の地域で、運上屋はその中心斜里に置かれた(図-1)。当時、村山家の名は「日本長者鑑」にも載せられたほど有名であり、村山家の繁栄をねたむものが伝兵衛の追放を願い出たとき、松前藩では伝兵衛と同様に滞りなく場所の仕込みや金策ができるなら許可してやるといわれ強訴したが、

一言もなく引き込んでしまったということが伝えられており、当時伝兵衛の請負った場所は、藩主の直轄領や知行地を合せて数十箇所に達しているという盛大なものであった。寛政4・5年頃の調査と思われるシャリ場所の状態を示す記録に「西蝦夷地分間」がある(図-2)。それによると場所内の家数383軒、総人数1,443人、その内訳は男502人、女490人、子供451人であった。これを統率していたのが蝦夷地最後の大酋長マウタラケ、チョウサマの2人であり、これを補佐する脇乙名は28人に及んでいた。領主(松前藩主・志摩守)の直支配の名目で、差配人は村山伝兵衛、シャリ詰支配人は文治、その下に番人・稼方6人が運上屋に詰めていた。運上金は、ソウヤ、シャリ共通の156両を折半して、小判78両となっている。なお、この時期におけるソウヤ、シャリ両場所の産物は「西蝦夷地分間」に次のように記されている。

ソウヤ	鱒凡五千束	煎海鼠(いりこ)	二百本
	秋味二千束	鱒(隔年)	鱒 厚司
	椎茸	魚油	カスへ
軽物	十徳	段切	虫巢 熊胆 熊皮
シャリ	鱒七千束	魚油二百樽	厚司千五百反



図-1 寛政10年(1798)のシャリ場所風景(谷口青山筆) 丘の上に神社と鳥居が画かれている。斜里最古の写生図。(函館図書館所蔵)

を置くと、失意にあった伝兵衛を大いに起用しようとしたため、松前藩でもこれを捨てておくわけにはいかず、翌11年2月、伝兵衛に先に没収した松前の居宅を返還し、4月には伝兵衛を一代侍大広間格に採用し、宗谷、斜里、樺太の三場所及び苫前、留萌、石狩の秋味手付を命じ、また、家屋及び倉庫数ヶ所を還付した。しかし、大打撃を受けた伝兵衛には昔の盛大さを取り戻すことはできなかったという。

4. 斜里神社の祭神

「斜里町史」によると斜里神社の祭神は、初め住吉大神を祀ったが、後に天照皇大神を主神とし、住吉大神を配祀神としたように書かれている。しかし、それは明治に入ってこの神社を村の鎮守とする際に決定したものと推測される。筆者の推測であるが、最初の祭神は、網走神社がそうであったように「弁財天」ではなかったかと思われる。このことについて、オホーツク海沿岸地域におけ



図-3 安政6年(1859)のシャリ場所風景(目賀田帯刀筆) 神社は弁天堂と記されている
(函館図書館所蔵)

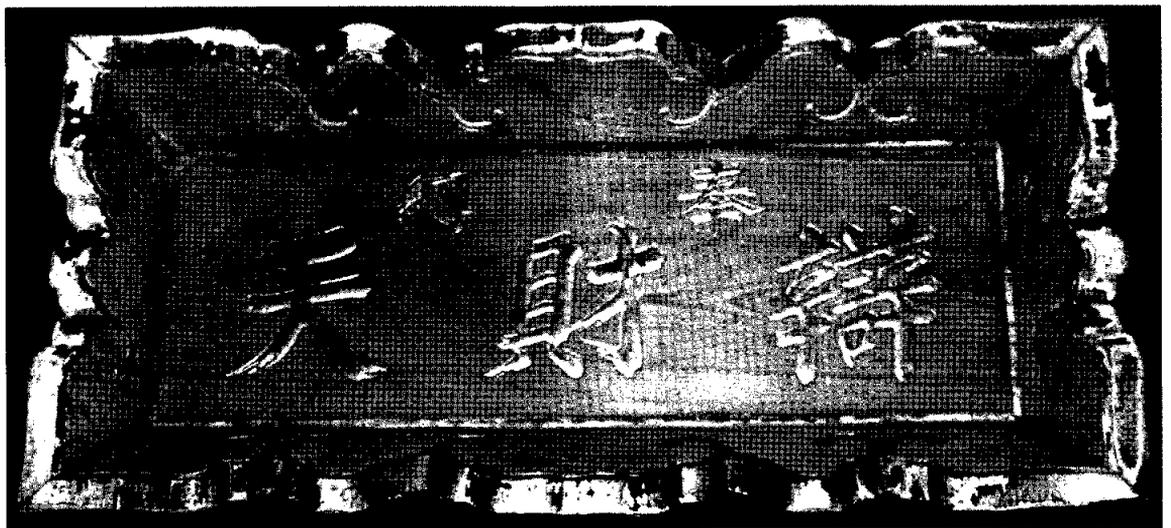


写真1 明治初期、斜里郡戸長川端又三郎が奉納した弁財天の額(知床博物館所蔵)

る神社の所在を初めて明らかにした松浦武四郎の「再航蝦夷日誌」（弘化3年）には、斜里運上屋の上の方に弁天社が建っていると記されているし、同年の網走・湧別・紋別・幌内の各神社も全て弁天社であった。また、同じ武四郎の「廻浦日誌」（安政3年）にはシャリに船玉社（2間×3間半）・稲荷神社（2間×2間）・観音堂（1間×2間）以上3社の坪数まで記されている。

また、これより後の安政6年、目賀田帯刀の「延叙歴検真図」斜里の図には弁天堂と明らかに記されている（図-3）。さらにこれより後の明治初期、斜里郡の初代戸長を務めた川端又三郎が斜里神社に奉納したした「弁財天」の額が現存しており（写真1）、明治26年の斜里外四ヶ村戸長役場文書（知床博物館所蔵）にも「弁財神社」の書入れがある。当時はまだそのように俗称されていたのであり、それが村の鎮守として斜里神社に移行したのは、その後のことと考えられる。それは漁村から農村へ移行する過程を物語るものであるが、斜里神社には由緒書が存在しないので、なお解明を要する問題がある。

5. 斜里神社の社祠は貴重な文化遺産

寛政8年、村山伝兵衛創建の斜里神社が祭神の変化はともあれ、その社祠を今に遺したことは幸いであった。現在斜里町立知床博物館に展示されているこの社祠（写真2・3）は、遠く寛政の昔から二百年の風雪を秘め、オホーツク沿岸地帯に遺された社祠としても、網走、紋別よりも古く最古のものである。それはシャリ場所の開発と村山家の功業を物語るとともに歴史の非情を今に伝える証でもある（写真4）。



写真2 寛政8年(1796)村山伝兵衛が寄進した斜里神社社祠(知床博物館所蔵)

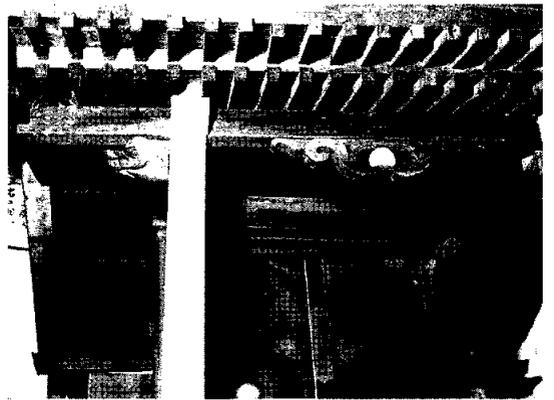


写真3 同上前面部分

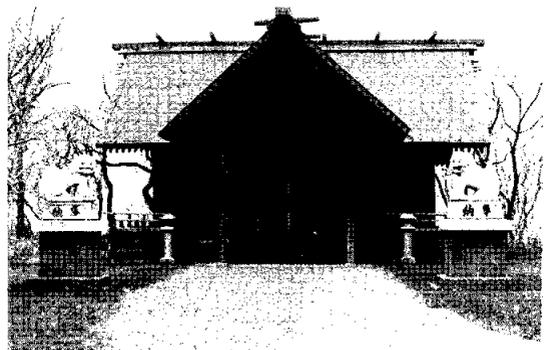


写真4 現在の斜里神社全景